

認知症高齢者が安心できる老人ホームでの快適な住環境とは ～介護福祉士と建築士の視点から～

介護福祉科

伊佐治愛也 内田真鈴 小里駿一郎 清水心 名真穂乃香 松井菜子 松井瑠奈
村尾柳之介 アンゲンペルマタサリ リジンチュウ

要約

施設生活を支障なく過ごしていただくためには、良質な住環境を整備することが基本となる。ケアの立場から、認知症を追い込まないためには「環境を変えないこと」と断言されている。やむなく環境を変える場合は、生活習慣を変えない、個室的空間や人間関係作りに取り組むことが必要である。そこで本研究は、認知症を患った高齢者の個室的空間に焦点を当て、介護福祉科と建築士の意見を共有して研究を行なった。在宅生活から施設生活への環境の変化に対して、戸惑いがなく過ごしていただけるような施策を提案することを目的とした。

キーワード：住環境 認知症高齢者 建築

【背景】

日本は、高齢者人口の急速な増加とともに認知症高齢者のより一層の深刻化が見込まれている。国立社会保障・人口問題研究所が行われた調査によると 2025 年まで 65 歳以上高齢者人口の 30%、75 歳以上高齢者は 17.8%になり、2055 年までは 38%と 25.1%になる。同時に 65 歳の高齢者の中、認知症高齢者は 20%を占めると予測されている。特に世帯主が 65 歳以上の認知症の方や単独世帯や夫婦のみの世帯が増加していく。2015 年から、65 歳以上の夫婦のみの世帯と 65 歳以上の単独世帯は世帯数全体の 23.5%から増加し続き、2040 年までも緩和する見込みがなさそうだ。心身機能が老化や疾病で下がり、介護を要する人口数と介護量が増加すると見られる。まだ、内閣府が行われた調査によると近年一人暮らし高齢者の中に介護の必要性が高くなると、現在の自宅ではなく介護施設やケア付き住宅などの施設で介護を希望する人が増加していく。施設サービスは介護サービスの中に重要な役割を果たし続けていく。

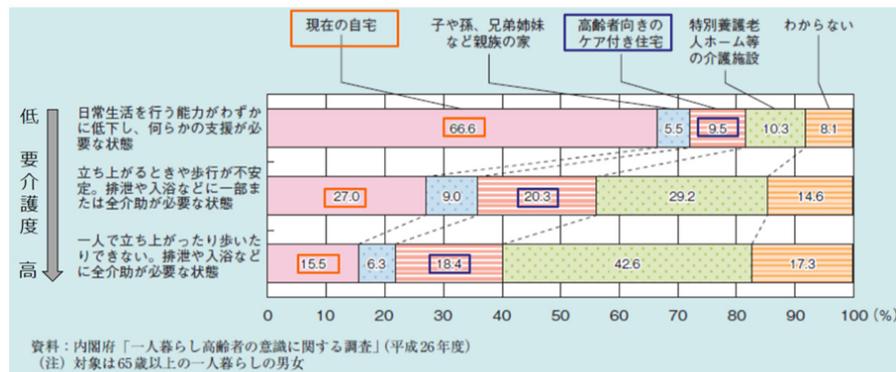
そのなかでも、施設サービスのひとつである特別養護老人ホームでは、多くの入居者に認知症の症状が見られるのが現状である。ケアの立場から(1)三好は、認知症を追い込まないためには「環境をかえないこと」と断言しているが、やむなく環境を変えねばならない場合は、個性的空間や人間関係づくりに取り組むことが必要であるとしている。認知症の症状を軽減するために薬物療法ではなく、非薬物療法であるケアの方法や住環境について長年議論されている。

1970 年代以降、海外を中心に認知症高齢者のための住環境のあり方が見当されてきた。認知症の短期記憶障害、場失見当識の症状を考えると、在宅から施設へ入所という住環境変化時は、その後の予後に大きな影響を持つと予測される。入所当日に「寝る場所の確認」で落ち着く、数日後に「特定の場」を手掛かりに安定化が進むため、認知症高齢者が適応するために「場」が重要である。しかし、施設での生活スペース作りには限界があり、本人の望む「場」には限界があるのも現実である。第二の住処である高齢者施設に関して、工事やリフォームが難しく金銭問題もある。さらに、高齢であるため ADL の低下があり転倒のリスクも高く安全性を重視した環境作りとなっているケースもある。例えば、ベッドからトイレまでの距離を短くする、伝って歩けるように物の配置を変更させるなど様々な工夫がされているが、過ごしづらい環境であると認識している場合もある。小規模な生活単位の中で個別的なケアを行うグループホームにおいて、環境によって認知症高齢者の BPSD が減少した事例や研究もこれまでに多数報告されているが、大規模な施設での研究が十分にされていない。

地域包括ケアシステムを構築するなかで、多様な職種が関わる“多職種連携”の具体的な展開が問われている²⁾。個別ケアを大切にしていくためには、生活の全体性を考慮し、総合的に支援して行くことが、介護福祉士に求められているが、介護福祉士は、高齢者の疾病やケアに関して知識があるものの環境作りに関して、知識は不足している。そのため、建築士からの視点が

非常に重要である。多職種と協働し専門的に基づく多角的な視点と意見を集約して行くことは、総合性を担保して行くことが重要である 3)。

表 1



【動機】

超高齢社会となり、介護福祉施設を利用する高齢者は増加している。その中でも認知症高齢者は家族の介護が非常に難しく施設での生活を余儀なくされている。認知症高齢者がその人らしく暮らせ、介護者がケアしやすい環境に目を向けることも、介護者の必要な能力ではないかと考えた。高齢者は自宅で過ごしたいと考えているが、認知症によって施設で過ごすことになる場合がある。そこで、施設で過ごすことになっても、利用者の尊厳を守った生活環境を提供したいと考えた。

介護福祉士の役割として、利用者の住環境を整え、施設での生活が快適になるよう取り組むことは重要な役割ではないかと考えている。多職種連携が非常に重要とされているなか、医療職者や福祉職者のみならず、他業界の専門職との連携することで、新たな知見が生み出すことができるのではないかと考える。トイレとベッドの距離が近く、住み心地が悪くなっているのではないかと考える。介護職からするとベッドからトイレまでの移動を短くする事で転倒の危険性がなく安心できるように工夫されているが、清潔感が無くなり利用者にとって充実した生活が出来ていない可能性もある。また、以前の自宅の様子とかげ離れたタンスや椅子の位置を改善することで、自宅に住んでいた頃の懐かしさを感じて頂け、認知症の症状を軽減できるのではないかと考えた。

特に医療職者や福祉職の観点だけではなく、建築専門学校と連携を取り、両方の専門的な見方を結びつき、新たな知見が生み出すことができるのではないかと考える。

(以前住まれていた自宅)

図 1



(現在のお部屋)

図 2



【目的】

- ①建設系専門学校学生と介護系専門学校学生の多職種連携により認知症高齢者の住環境について検討し特別養護老人ホームに提案する。
- ②実際に利用者の居室をリフォームし検証する。
本研究は、高齢者の生活環境と住環境に着目し、施設居住高齢者の生活環境と住環境を把握し生活満足度や周辺症状の関係について明らかにすることを目的とした。
建築の専門学校と連携で利用者の自宅の環境をある程度にリフォームで再現し住み慣れた住環境へ整える。リフォーム前後、利用者の生活の満足度や認知症周辺症状の変化を明らかにすることを目的とした。

【仮説】

- ① 住環境は本人のニーズに合わせることで、生活の満足度が増加し心地よく過ごすことができる。
- ② 他職種と連携し協働することで各専門職の意識の変化が生じる。

【方法】

対 象：自宅から特別養護老人ホームへ入所された女性 1 名

調 査 方 法：実験、アンケート

{取り組みの流れ}

ステップ 1

認知症高齢者の住環境を考える、多職種連携チームを立ち上げた。建築を学ぶ専門学校と介護を学ぶ専門学校のお互いの学校の特徴や専門性についてプレゼンし、研究を進める中でのそれぞれの役割が見えた。介護業界からは社会福祉法人隆生福祉会にもご協力いただいた。

ステップ 2

今回の研究でご協力いただく特別養護老人ホームの利用者と介護職員から情報収集を行った。利用者にインタビューを行い、その方の人物像やニーズを把握し、施設の職員に利用者の ADL などの聞き取りを行う。また、利用者の居室の見学も実施した。特別養護老人ホームに、研究の概要を説明し紹介頂いた O 氏の情報。認知症は中等度であり他の利用者の方との会話なし。普段は居室よりリビングで過ごすことが多い。屋内では独歩で、骨折の経験があり転倒に注意が必要。職員のリスクマネジメントの考えが強く、ベッドをトイレの前から移動させることに否定的な意見が強くみられた。話し合いの中で、センサーマットを使って検討いただくことになる。結果的にベッドをトイレの前から移動の決断にいたった。

ステップ 3

修成建設専門学校の学生に 3 つのリフォーム案を作成いただき、模型を使用しながらのプレゼンテーションして頂いた。どの案も PEAP(ピープ)による環境づくりの指針に基づいた案だった。しかし、介護福祉科の学生から見ると認知症高齢者の BPSD に対する環境への対策が不十分だということが見えてきた。特に環境の変化に敏感であることや異食行為への対応に関しては改善が必要であると意見を述べ、ディスカッションを行った。数日かけてディスカッションを行う中で図面や模型も作成頂き、より具体的な居室空間の議論ができた。環境作りに工夫をし視覚嗅覚触覚からの刺激的な情報を増やすことで、忘れかけていた記憶を思い出すような工夫をした。

ステップ4

ここまで議論してきた最終リフォーム案を介護施設に提案した。後日、法人本部とも話し合いリフォームが実施できるか検討いただくこととなった。

ステップ5

リフォーム実施前後に、O氏に関わりのある7名の職員を対象に、O氏の変化や職員の意識の変化を知るため、アンケートを実施した。

表2

各項目について当てはまる数字に1つ〇をつけてください						
	そう思う	まあそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない	
1	1	2	3	4	5	
2	1	2	3	4	5	
3	1	2	3	4	5	
4	1	2	3	4	5	
5	1	2	3	4	5	
6	1	2	3	4	5	
7	1	2	3	4	5	
8	1	2	3	4	5	
9	1	2	3	4	5	
10	1	2	3	4	5	
11	1	2	3	4	5	
12	1	2	3	4	5	
13	1	2	3	4	5	
14	1	2	3	4	5	
15	1	2	3	4	5	
16	1	2	3	4	5	

実施後のO氏の変化は具体的にどのようなものがありましたか
例) 以前の自宅の話をするようになった
利用者さんの発言 等

お忙しい中ご協力いただきありがとうございました。

ステップ6

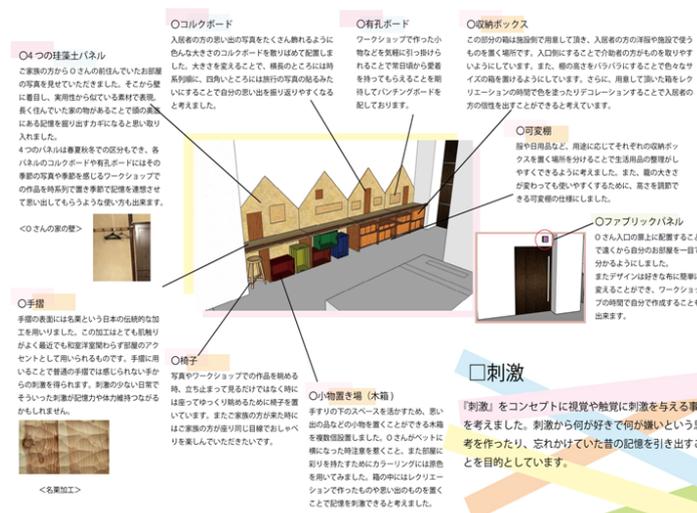
議論の末に、下記の案が介護施設から許可を得たものである。認知症の方に必要な日常生活の中の刺激をコンセプトに視覚や触覚に刺激を与え、また忘れかけていた昔の記憶を引き出す回想法に似た刺激を目的としたリフォームとなった。

ステップ7

修成建設専門学校で建築科の先生や学生さんから指導していただきながら、協力し作成した。12月13日に利用者の居室に設置することができた。

【最終設計案】

図3



- 椅子…写真やレクリエーションでの作品を眺める時、立ち止まって見るだけではなく時には座ってゆっくり眺めることができる。また、ご家族の方が来た時にはご家族の方が座り同じ目線でおしゃべりを楽しんでいただける。
- 小物置き場(木箱)…手すりの下のスペースを活かすため、思い出の品などの小物を置くことができる木箱を複数個設置。0氏がベッドに横になった時注意を惹くこと、また部屋に彩りを持たすためにカラーリングにはせ原色を用いた。箱の中はレクリエーションで作ったものや思い出のものを置くことで記憶を刺激できる。
- コルクボード…0さんの思い出の写真をたくさん飾れるように、色々な大きさのコルクボードを散りばめて配置。大きさを変えることで、横長のところには時系列順に、四角いところには旅行の写真を貼る→思い出を振り返りやすくなる。
- 有孔ボード…レクリエーションで作った小物などを気軽に引っ掛けられることで、常日頃から愛着を持ってもらえることを期待してパンチングボードを配置。
- 収納ボックス…0さんの洋服や施設で使用する物を置く。入口側に設置することで介助者が物を取りやすい。棚をバラバラにすることで色々なサイズの箱を置くことができる。レクリエーションの時間で箱に色を塗ったりデコレーションしたりすることができれば、0氏の個性を引き出すことができる。
- 可変棚…服や日用品など、用途に応じてそれぞれの収納ボックスを置く場所を分けることで、生活用品の整理がしやすくなる。
- ファブリックパネル…居室の入口の扉上に配置することで、一目で部屋の認識ができる。
- 4つの珪藻パネル…0氏が以前過ごされていた部屋の壁に着目し、実用性から似ている素材で表現。長く住んでいた家の物があることで記憶を掘り出す。4つのパネルで春夏秋冬の区別ができるなどの工夫ができる。コルクボード、有孔ボードは、季節の写真や季節を感じるレクリエーションでの作品を時系列で置き、季節で記憶を連想させ、思い出してもらう。
- 手摺…日本の伝統的な加工「名栗」を用いる。普通の手摺では感じられない手からの刺激を与えることで記憶力や体力維持に繋がる。

〔リフォーム後の0氏の部屋〕

図4



分析：アンケートにおける5段階評価を行い前後の比較。

倫理的配慮：施設その方の長へ研究の主旨を説明して了解を得た。その後、施設入所者で認知症と診断された高齢者を候補者として紹介頂き、本人と家族に説明を行い、強制力がかからないように配慮した。調査対象となる入居者に対し、職員より調査の目的や方法について説明して了解を得た。また、アンケートや面接前に再度了解を得てから行った。得られたデータについて、個別データが特定されないように扱い、プライバシーの保護に努めた。

【結果】

表3

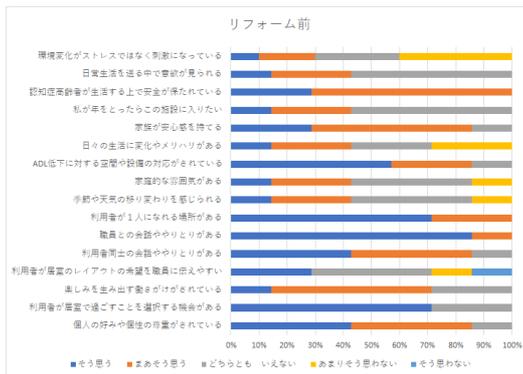
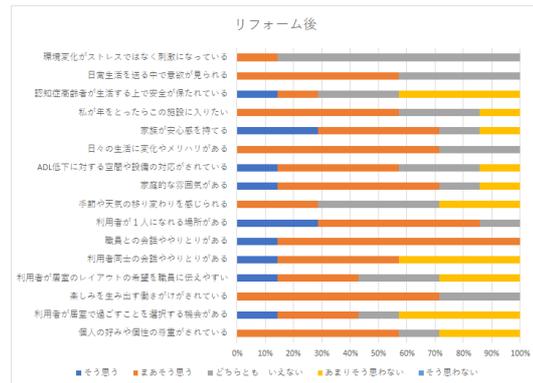


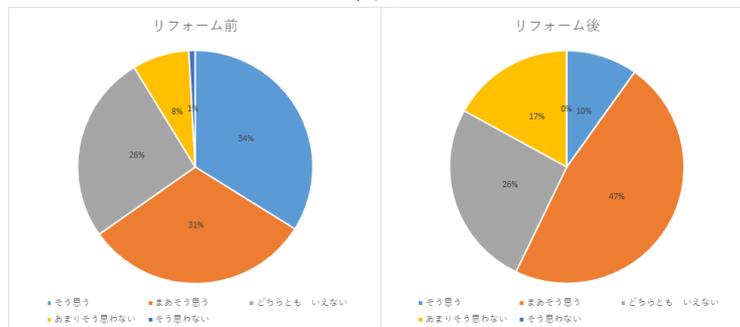
表4



リフォームを実施後、アンケート結果が変化したことが分かった。

「環境変化がストレスではなく刺激になっている」に対して「どちらともいえない」と答え、意見が明確に表せない職員の割合が85%以上になり、「そう思う」や「まあ思う」の肯定的な態度を持つ職員の割合が増加したことが明らかになっている。また、「認知症高齢者が生活する上で安全が保たれている」に対しては「そう思う」と答えた職員の割合は28%から14%に減少し、「まあそう思う」と答えた職員の割合は72%から13%に下がる結果となっている。肯定的な意見はリフォーム前の100%からリフォーム後の30%未満に落ちたと明らかになっている。さらに「家庭的な雰囲気がある」に対しては「そう思う」や「まあ思う」と答え、肯定的意見がもてる職員の割合が40%から70%に増加されたと示された。そして、「職員との会話ややりとりがある」に対してはリフォーム前後、「そう思う」という意見の割合は85%から15%に減少し、「まあそう思う」の割合は15%から85%に増加されが肯定的意見が同じ100%に保持することができたと分かった。また、「日々の生活に変化やメリハリがある」に対しては「そう思う」と答えた職員の割合がなくなったが「まあそう思う」と答えた職員が増え、肯定的意見の割合が42%から72%に上がったことが明らかになっている。

表5



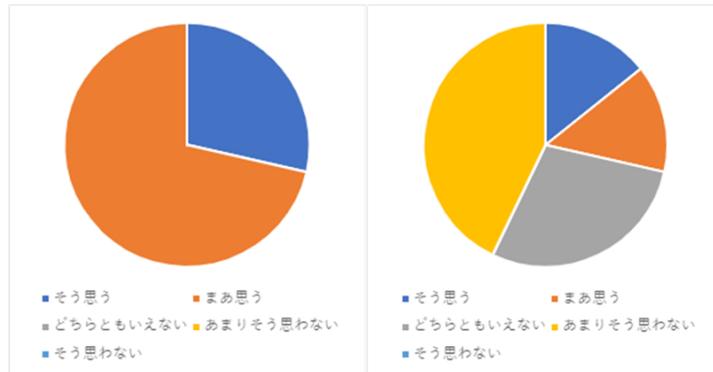
アンケートを全体的に見ると、「そう思う」と答えた割合が34%から10%に減少され、「まあそう思う」と答えた割合が31%から47%に増加されたと分かった。「どちらともいえない」と答えた割合は変化がないとみられた。リフォーム後、「そう思わない」という答えがなかったが「あまりそう思わない」と答えた割合は8%から17%に上がったと明らかになっている。全体的に肯定的な答えが下がり、否定的な答えが上がったと示されている。

【考察】

職員のアンケート結果を全体的にみると、住環境が改善されたという結果は出ず、私たちの予想に反する結果となった。反省点として、実施期間が短かったことや現場で働く職員への説明不足があげられる。しかし、今後続けて使用していただくことで、利用者や職員の変化が見られる可能性がまだあると考える。

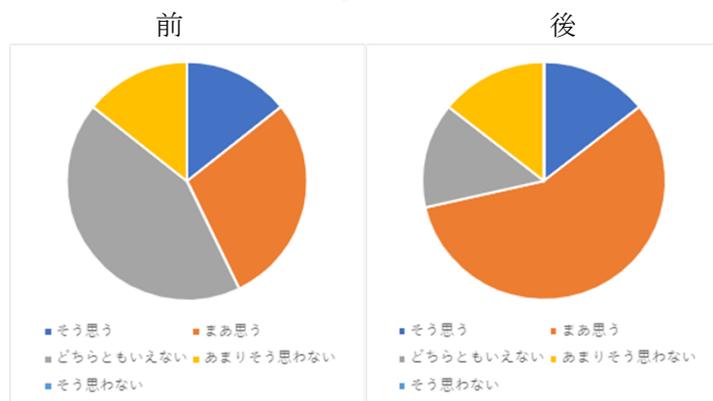
アンケート結果からの考察

表 6



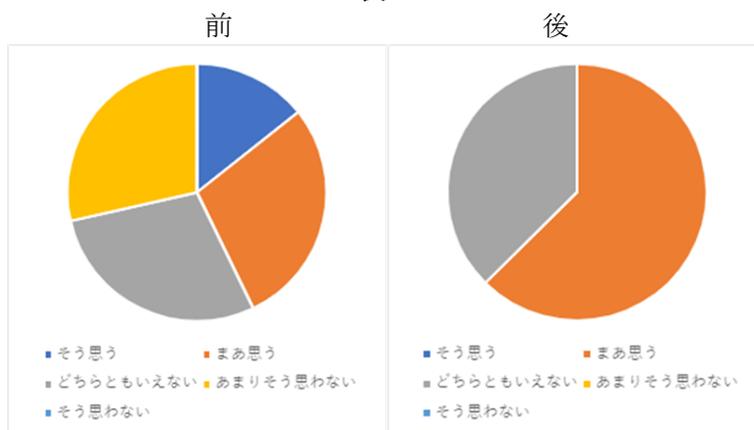
「認知症高齢者が生活する上で安全が保たれている」の否定的な意見が増加したことに関しては、ベッドをトイレから離れたことや居室全体の環境を変えたことが、安全性にきていると捉えられたのではないかと考える。

表 7



「家庭的な雰囲気がある」の肯定的な意見が増加したことに関して、入所前の利用者の自宅環境を参考に、その環境に近づけたことが家庭的な雰囲気を生み出したのではないかと考える。

表 8



「日々の生活に変化やメリハリがある」の肯定的な意見が増加したことに関して、環境変化における刺激が日々の生活に変化やメリハリがあるという介護職員の判断に繋がったと考える。

建設系専門学校と介護系専門学校、介護施設での議論を進める中で、互いの専門性や知識を出し合う機会となり、それぞれの考え方や視野が広がった。その理由として建設系専門学校の学生は認知症高齢者の特徴やBPSDなど知識が少なく、リフォーム案を考える上で介護の学生か

らの意見が必要であった。介護職員は優先順位として安全性を重要視するため、トイレの前にベッドを置くことに不自然さを感じなかったが、建築の視点からすると不自然であるという気づきがあった。介護施設からは、施設の基準や消防法の規制を視野に入れリフォーム案の修正を求められることもあり快適さだけでなく色々な規制の下にリフォームを考えることを学んだ。

【結論】

結論として、1つ目の仮説に関しては、当初対象の利用者氏ご本人からニーズや満足度調査を実施する予定だったが、認知症の症状進行のため難しく、ご家族や職員に協力いただき、馴染みの住環境を提供できなかった。よって、考察も踏まえ、肯定とも、否定とも言えないが2つ目の仮説は肯定されたと考える。

本研究で取りあげたような、介護者はただ介護を提供するだけでなく、住環境も含めた支援が必要である。しかし、それは介護者だけの判断でなく、今回の研究で建築専門学校や施設のご協力なしにできなかったように幅広く様々な専門職と連携することが重要である。この研究をすることで、利用者の落ち着いた居場所づくりに貢献し、対象となる利用者の劇的な変化が見られなくとも、施設側の安全を重視した考えから、住み慣れた環境を尊重する考えに関心を寄せるきっかけになったのではないかと考える。

【参考文献】

- 1) 三好春樹：「痴呆論」雲母書房, 62 頁
- 2) 菊地和則：多職種チームの構造と機能－多職種チーム研究の基本的枠組み．社会福祉学, 41(1), 13－25, 2000
- 3) 松岡千代：「健康転換」概念からみた高齢者ケアにおける多職種連携の必要性．老年社会科学, 33(1), 93－99, 2011.